



報道されないタリバンの素顔

17年間医師としてアフガンに暮らして

実際のタリバンは理解不能な狂信集団ではなく、融通無碍であり、民衆に媚びる面も持っている。そうした事実がまったく伝えられていない

なかひろ てつ
中村 哲

〔医師、ベシャワール県現地代表〕

無政府状態だった

八四年に、私はNGOの医師としてパキスタン・ベシャワールに赴任しました。そしてその後今日に至るまで、一七一年間にわたって、パキスタンとアフガニスタンで医療活動に従事しています。ですから私の場合、九四年に突如出現し、九六年に政権をとったタリバンよりもアフガンについては古参なのです。

体験で、不気味なほど静かなだけに、それだけにこれほど激しい反米感情を目にしたことはありません。理由は簡単です。現地の人々にとって、今回のアメリカによる空爆は「理不尽な攻撃」以外のなものでもない。いかにアメリカが正当化しようとも、彼らにとっては、そのように映っているのです。

タリバンについては、それこそ洪水のような報道がされています。しかし、その内容というと、あまりに一面的といえますか……。狂信的な部分だけが報道されて、一種のオカルト集団の扱いです。これにはびつくりしました。

実際のタリバンは理解不能な狂信集団ではありません。もちろん、おかしな部分もありますが、ごく普通の人間集団でもある。

タリバン政権は、いってみれば非常に古風な農村社会を代表する「田舎政権」そのものなのです。今回のテロで見せた組織的な動きなんて彼らにはとうてい



中村 哲氏

1946年福岡県生まれ。九州大学医学部卒業。国内の診療所勤務を経て、1984年にパキスタン北西辺境州の州都ベシワールに赴任。以来、17年間にわたり、ハンセン病など貧民層の診療に携わる。現在、アフガニスタンとパキスタンに1病院、10診療所を設立。千駄で、水源600本を確保するため、作業の陣頭指揮も執る。1988年外務大臣賞、96年読売医療功労賞、98年朝日福祉賞、2000年アジア太平洋特別賞などを受賞。著書に『医者は国境を越えて』『医者 井戸を掘る』などがある。

きません。現地の人ほとんどは読み書きすらできないのですから。

ただ、今回のアフガニスタンをめぐる状況については、彼らの情報判断は非常に正確です。一部に、アフガニスタンで報道管制が敷かれているとの報道もありますが、実際には、現地ではBBCパシトゥン語放送によってかなり正確な情報を得ている。バイアスのかかった報道に冒された日本人より、はるかに事態を把握しているといえるでしょう。

タリバンの一部がビンラーディンに協力していることも承知の上で、「彼は錠として守るべき客人ではあるけれども、迷惑だ」というのがタリバンの大部分を含めたアフガン人の一般的な受け取り方です。ビンラーディンに巻き添えを食っ

て、何の罪もない自分たちが世界中から標的にされるのは、理不尽以外のなにものでもないのです。



カブールの最前線で機関砲を構えるタリバン兵士©毎日新聞社

八九年のソ連撤退後、ナジブラ政権を倒したラバニ、マスードらのムジャヒディン（イスラム武装勢力）は、九二年にカブールを占拠し暫定政権を打ち立てました。しかし彼らは統治能力がまったくないどころか、軍閥の内戦を激化させ、アフガニスタンを混乱に陥れた。

私も何度も目撃しました。カブール市内では、婦女暴行、拉致、襲撃、略奪婚

などが横行していました。ゲリラ兵が街に入ってきて、美しい女性を目にすると、強引に連れ去るのです。そして自分の妻にしてしまう。女性は、暗闇はおろか昼間でも外を歩けない状態でした。

殺戮もひどいものです。先般、自爆テロに遭って命を落とした北部同盟の将軍、マストドなど、日本では好意的に報道されていますが、とんでもありません。当時、マストドは暫定政権に入っていました。市中にある小高い丘から大砲でハザラ族の住宅地を無差別攻撃した挙げ句、破壊させるなどの暴挙を繰り広げ、一万六〇〇〇人の市民が死亡しました。当時のアフガンは完全に無政府状態でした。そんななか、突如現れたのがムラー・ムハンマド・オマル率いるタリバン（イスラム神学生）だったのです。彼らが混乱を収めてくれる救世主に映ったのは言うまでもありません。

彼ら以外にない

旧ソ連軍の精鋭一〇万でもできなかった

たのに、わずか一万五〇〇〇名の兵力しか持たないタリバンが、わずか二年でアフガニスタンの九割を制圧するのはほぼ不可能と見られた。しかし、実現した。その背景には各部族ごとの伝統的な「ジルガ（長老会議）」の存在があります。アフガニスタンの政権構造を実質的に決定する役割をもつジルガは、当時、横暴を極める暫定政権に頭を痛めていました。



荒廃した首都カブールの市内

彼らに代わる政権として、ジルガはタリバン勢力を積極的に迎え入れたのです。実際にタリバンの進駐に、国中が安堵した。ジルガ、すなわち民衆の平和への希求を背景にタリバン政権は成立したので、混乱した無政府状態から脱するには、彼ら以外にないとアフガン民衆自身が判断したので。

しかし、一歩アフガニスタンから国外へ出ると、タリバンについての悪評が蔓延している。狂信的な部分だけが取り出され、人権を抑圧するオカルト集団のようには報道されている。私には、先に述べたようなタリバン成立の背景を無視した現在の報道は、「タリバン＝過激なイスラム主義を強いる悪玉」という偏向した世論をつくり出しているように思えるのです。

実際のタリバン政権はかなり融通無碍な一面を持っています。そもそも民衆にある程度の妥協、悪く言えば媚びを売らないと政権は成り立ちません。そうした点が、まったく捨象されて伝えられてい



ハトのマークをつけたベシャワール会のトラック

ないのが現在の報道です。

たとえば、偶像崇拜禁止。私たちが使用している車には、日の丸と、会の象徴のハトと三日月のマークが入っています。これが偶像崇拜の対象になるといいます。カブールの入り口で止められ、最初はどうしたものと、びくびくしました。どうすればいいのかと聞くと、宗教警察は「マークにバンソウコウを貼れば大丈夫だ」と苦笑しながら通してくれたのです。

また、建前上、女学校は廃止されています。しかし、実際にはもぐりの女学校が存在する。産婦人科の医師や助産婦は必要ですから。タリバン政府は見えて見ぬふりです。それどころか、タリバン自身が子弟をバキスタンに送り（アフガニスタンではさすがに面子が立たないため）、娘に教育を受けさせている現実があるのです。

厳しい戒律が、すでに実社会に即きないという矛盾を権力側も分かっていた上で、本音と建前の二重構造を許しているのです。民衆にしてみればタリバン政権のそうした矛盾は些細なことにすぎません。英米の支援で元の暫定政権（＝現北部同盟）が戻ってくるほうがもつと困る。彼らが帰ってくるならば徹底抗戦するという姿勢は、決してタリバンが煽動しているものではないし、少なくとも北部の一部を除くアフガン人は、タリバン政権が崩れることを望んでいないのです。

「アメリカの空爆には抵抗しようがないが、軍事拠点だけ攻撃するというなら、

昔の暫定政権がやった無差別殺戮に比べればずっと安心」、何より「あの無政府状態が再現されるのはご免だ」というのが彼らの本音です。

首都カブールとミニスカート

アフガニスタンの二重構造にはもうひとつの側面があります。それは首都カブールの変遷です。

現在のアフガニスタンは全体で見れば、兵農分離もできていない。農村型中世社会にほかなりません。しかし、首都カブールだけは、王族によって積極的に西歐化・近代化が推進された時期がありました。ソ連侵攻までのことです。

当時のカブールには、女性の民族衣装「ブルカ」を脱ぎ、ミニスカートを穿く女性たちが闊歩していたんです。さしずめ国王様の城下町、中世の中にぽっかり浮かぶ近代コミュニティといった様相を呈していました。

唯一の近代都市カブールで、ミニスカートの代表される西欧文化を享受したの

は一握りの富裕層、知識層です。しかし彼らはタリバンが来る以前に、動乱の首都から国外へ脱出してしまった。残されたのは西欧化の恩恵に与らなかつた貧民層、さらに農村社会から流れ込んできた飢餓難民でした。

アフガニスタンの封建制にインパクトを与えたのは、ソ連です。皮肉なことに、ソ連が掲げた改革の綱領には、資本主義的近代社会に通じる男女平等などの人権策がふんだんに盛り込まれていました。それを伝統社会とまったく対立する形で押し付けたのは間違いでしたが、西欧型グローバリゼーションへ向かうひとつの露払いだったと言えば言えなくはない。ソ連共産主義の侵攻によって急ごしらえの近代化が失敗したアフガニスタンにとって、グローバリゼーションとは、所詮アメリカを筆頭にした西欧経済主義・西欧文化主義の押し付けにすぎません。中世そのものといえる今のアフガニスタンには、マクドナルドやコカ・コーラに象徴されるような経済グローバリズムが

入る素地さえありません。整備された貨幣経済はなく、物々交換が存在する地域すらざらにあるのですから。つまり、アフガンとは田舎政権タリバンでなければ統治できない封建的中世農村社会なのです。

むしろ、グローバリズムは、タリバンが代表し、国の九割以上を占める農村ではなく、知識層や富裕層が住むカブールこそ受け入れる素地があつた。しかし、彼らは国外に逃げ、カブールすら、貧困層があふれている。グローバル化の恩恵に浴する段階にはとうてい至っていません。

加えてイスラーム社会では、「儲ける」という商行為そのものが軽んじられる傾向があります。グローバリズムの根幹を成す資本主義経済そのものが否定的に捉えられているのです。そうした半ば自給自足の生活のなかに、突然、現金生活が入ってくる。そして金を持ったものが勝つていく。彼らに映るグローバリズムとはこうした姿です。

極端な例は、ロバやラクダの隊商がト



水源を確保するための井戸掘り

ラックの運送業者に対して反感を持つという構図です。トラックは農民にとっても便利ですが、それを享受できるのはごく一部。運送需要を拡大しようにも、農業一辺倒の社会には産業がない。結局、近代化の流れで出現した資本主義的特権階級が存在は、農民にとつて許しがたい存在に映るのです。こうしたなかで、相互扶助的に成り立ってきた農村共同体が少しずつ崩れ始めている。この現実に対



干魃で深刻な水不足に。泥水を飲むアフガニスタンの子ども

する反感、反動が強まっているのです。アメリカに代表されるグローバリズムに最後まで抵抗するのは、近代的な経済基盤を持たない最貧国、アフガニスタンといえるのではないのでしょうか。

一方、文化のグローバリゼーションで

いうと、人権活動家にとって最大の攻撃材料になってきているのが、女性を頭からすっぽり包む、例のブルカです。

世界中から、女性差別の象徴のように糾弾されていますが、これはアフガニスタンだけではなくパキスタン北部にも見

られる伝統的な民族衣装なのです。タリバンが無理やり被せたというわけではありません。ちょうど日本女性が昔、和服を着ていたようなもので、女性一般の社会慣習として見るべきでしょう。

もちろん、アフガニスタンは男性社会であり、女性にとって厳しい社会であることは間違いありません。しかし、それを即、女性虐待に繋げるのは浅はかです。ある意味では彼らのやり方で保護しているものが、欧米風に見ると虐待と映るに過ぎない。無論、アフガンの女性に、自分たちが虐待されているという意識はありません。ついでにいえば、「アメリカなんかにはブルカのことを言われる筋合いはない」。これがアフガン女性の感覚でしょう。

私の見るところ、あの強固な伝統社会を底辺から支えている最も強力なパワーは、女性です。ともすれば妥協しがちなアフガン男性の尻を、「あんた、それでも男か」と叩いているのがアフガン女性。どこの村でも見られる光景です。抑圧さ

れているようで、実はアフガン社会をコントロールしているのは女性のほうではないかとさえ思います。

しかし、一部の西欧化した知的特権階級が女性差別を訴えているのも事実です。西欧文化の恩恵を受け、国連やNGOの職員となったアフガン女性たちが、こうした慣習に当然反発し、国外へ脱出した。「タリバン＝悪」を国外で喧伝する彼女たちの人権外交が、世界のマスコミにフォーカスされ独り歩きしている、というのが私の見方です。

フリーダム・ファイター

もともとアフガン人の反英米感情は相当地に根深いものがあります。

イギリスを敵対視するのは、過去二度にわたるイギリスのアフガン征服戦争に由来します。彼らを二度にわたり撃退した自負心が、現在の誇り高きアフガン人気質をつくっているといえるでしょう。

報復テロ以降、高まっている反米感情についてはもう少し複雑です。

ソ連侵攻時、アメリカはアフガンゲリラ組織を、フリーダム・ファイター（自由の戦士）として積極的に持ち上げ、てこ入れした経緯があります。その中にはビンラーディンなど、アラブ義勇軍たちもいました。ところが、ソ連が崩壊し、目的を果たしたとみるや、アメリカはさっさと引き揚げてしまった。これに対し、「アメリカに利用されただけじゃないか」という敵意が生まれたのは当然です。これは何もアフガニスタンばかりではありません。現在、米国に協力姿勢を示している隣国パキスタンも同様の感情を持っています。

当時アメリカは、冷戦構造の中で、共産勢力に対抗する反動勢力として、図らずもイスラム主義に支えられたゲリラ支援に回った。それが、同じイスラム主義に対し、今度は敵となって攻撃してくるフリーダム・ファイターの中身はいったい何なのだ、という反感がアフガン人の中にあるのです。

もともと現在のアフガニスタンが抱く

アメリカに対する極端なまでの敵意は、タリバン以前にさかのぼる話です。彼らの反感は、かつての反大英帝国の一シリースとして、英米アフガニスタンへの侵略者（国土を蝕む者、文化侵略者）というイメージが常に底流にある。支援を受けてきたゲリラたちにしても、今はアメリカの力を借りておこうという程度のもので、結局、敵は敵という認識に変わりはありません。

もともと、過去のカブール一極近代化政策がクツシヨンとなれば、アフガニスタンに西欧型グローバリズムを受け入れる素地がないとはいえません。だが、自国の文化を否定して、力づくで西欧化を押し付けてくることに彼らの反発があるのです。

グローバリズムと自然の復讐

資本主義の対立軸だった共産主義が世界的に崩壊した後、貧民を代弁するイデオロギーとして共産主義に代わるものは生まれていません。また生まれようもな



中村氏の診察を待つアフガンの患者

い。となれば、貧者にしてみればコーランの中にそれを求めるしかないのです。実際に、ある程度、アフガニスタンでそれを代弁しているのがイスラム原理主義です。ひと昔前の西洋、あるいは日本ならば、共産主義者になっていた人たちが、ファンタメンタリスト（原理主義者）としてイスラム原理主義を掲げたのです。しかもアフガニスタンは他の地域で行われたような近代化の手続きを踏んでい

ません。いわば混乱した中世社会のままです。そこに厳格なイスラム原理主義を掲げたタリバンが登場した。彼らはそれなりのイデオロギー的解決策を持っていました。大地主が逃げ出し階級差別のなくなっていた農村社会で、彼らは一種の平等主義的な政策を執行したのです。そこには、ユニバーサリズムという擬似近代的思想も含んでいた。それゆえに、アフガニ民衆はタリバンを支持したわけです。これがアフガニスタン・タリバン政権の現実です。

今の世界の潮流の中では、タリバン政権はいずれ潰れる運命にあるでしょう。グローバリゼーションの流れは、少しずつ農村社会の分解を促進していくでしょう。しかし、その前に、相当な徹底抗戦が繰り広げられることは避けられません。もっとも、アフガニスタンが今、経験している混乱は、違った形でやがて周辺諸国にまで及ぶでしょう。そのひとつの要因が「干魃」「砂漠化」です。地球温暖化によって、乾燥地帯を潤してきたヒン

ズークシヤやカラコルム山脈の雪が消えつつあります。今、アフガン農民の居住空間そのものが、物理的に消滅しつつある。これは戦争よりも恐ろしいことです。アフガニスタンから約一〇〇〇万人の人口がたたき出されたらどうなるか。農村社会が破綻した末の国民総難民化が、現にアフガニスタンで起こりつつあるのです。こうしたアフガニスタンの現実を、西欧グローバリゼーションと真っ向から対立するものです。不必要に消費生産を繰り返さなければ生き延びられない西欧グローバリズムの構造が、自然の復讐として、アフガニスタンに干魃をもたらしているという現実を忘れてはなりません。アフガニスタンを発火点として波及する混乱は、世界に何かを訴えるものになるはずです。究極はグローバリゼーションの再編成が起こる可能性さえ秘めている。西欧主導のグローバリズムが生み出した歪みを、本能的に知っているのは、字も読めないアフガニスタンの一般民衆なのかもしれません。